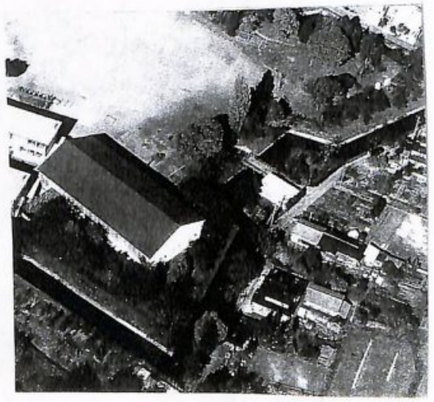
18－11

日帰りバスで＜松代城＞と＜龍岡城＞を歩く OB

平成１８年１１月１１日（土曜日）

ご案内＝山岸弘明

松代城



龍岡城

城史跡ＯＢ会 バス最終会

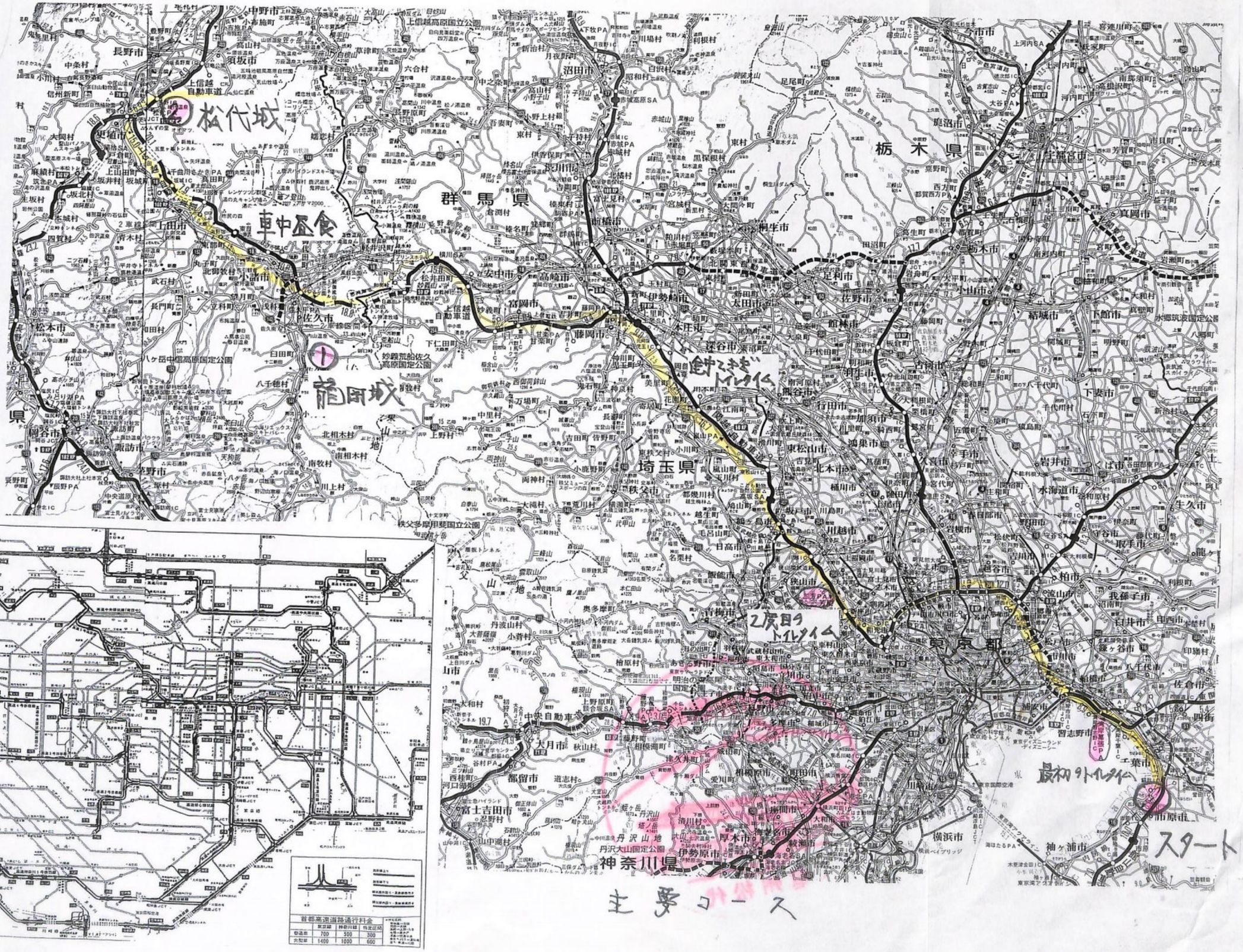
バス席表

出入口側 D.石島、G.島山　　運転手側

1	小出惣治	山岸弘明		鷲津寛子	高澤恒子
2	渋木恵美子	高沢　毅		皆川　清	金子昭夫
3	長島英子	佐倉光子		板倉　満	若菜幾世
4	鈴木クニ子	千葉範子		竹内佐紀子	山田恵美
5	桑原絹枝	中村節子		今井勝昭	小北絢士
6	加藤幸子	卯月礼子		白土貞子	西村澄子
7	渡辺清枝	鈴木淳子		吉水正子	猪野春枝
8	小山章一	小山俊子		竹上　成	稲葉ミツ子
9	斉藤定子	池田美志子		高城正雄	高城富子
10	森山正子	永原昭代		目瀬百合枝	斉藤笑子
11	田中勝子	神林敏夫		吉池一彦	吉池町子
12	多村勝彦	鶴丸千歳		笹島　稔	小野芳樹

世話人分担
山岸　＝ご案内
小出　＝総括進行
高澤毅＝進行
高澤恒＝五井駅乗車担当
鷲津　＝総務、八幡公民館乗車担当
高澤恒＝〃　五井駅乗車担当
協力　皆川　＝写真

緊急連絡用携帯番号　０９０－１８５６－２３３８（高澤　毅）


2 松代城
車中食
1 龍岡城
途中でまぜ
トイレタイム
栃木県
群馬県
埼玉県
東京都
神奈川県
2度目の
トイレタイム
最初のトイレタイム
スタート
主要コース
目的高速道路案内図
首都高速道路通行料金
東京都 神奈川県 特定区間
普通車 700 300 300
大型車 1400 1000 600

龍岡城 五稜郭

龍岡城五稜郭は函館とともに日本に二つしかない星型平面の洋式城で貴重な史跡である。

この城を築いた老中松平氏藩の藩主松平乗謨は幼時より兵明の素質をもち、十七歳にして和漢の学問のすべてを修得し、当時徳川幕府が鎖国により海外諸国より寄しい軍備の立ち遅れに、国家存亡の危機を感じ、洋学を志して国学（オランダ）は英蘭辞上山脇玄本郎に、仏語は出雲松江入江文郎に師事し、特に火砲・築城技術を熱心に学び、積極的に家臣にも洋学の勉強を奨励してきた。

彼は早くから洋式築城にあこがれ、当時四辺の状勢より海防政策を意見した幕府は、江戸・大坂湾の御台場、松前函館切地陣屋・箱館五稜郭など続々と洋式築城技術を取り入れており、乗謨もこれに刺激され、設計者市川一学・武田斐三郎らの門を叩いたかも知れない。

文久三年（一八六三）正月・大砲鋳造用とともに、翌年の学勢交代制度により家臣の在国期間が長くなり、従来の本藩三河が四千石でその後さから信州藩一万二千石の地に本藩移転を願い、また併せて新陣屋五稜郭築城の許可も申請し、六月の陣屋絵図の公儀提出により許可が下り、七月には家老出井勘之進に普請奉行を命じ、藩下村々へ新陣屋建設を触れている。築城担当者も九月に模型を完成させている。

慶応元年三月、旧野口村が献上した間村龍岡の地に、御手当村より献米・献木と創り当てた人足、それに近隣他藩の村々からも労力奉仕や、献金もあって着工している。五稜郭の一番堀工事は石垣で、これは当時御郡高遠藩が洋式築城石工を積極的に委嘱し、方々へ派遣していたのでこれを招き、棟梁二人が石工二十人とともにきて、三年をかけて建設している。石は千曲川第一帯に産出する佐久石を広範囲にわたり切り出し使用している。

石垣はまず根石の上を厚さ一メートルぐらい粘土で叩き固め基礎とし、砲撃・地震などで狂わないよう緩衝作用をもたせ、かつ地下水による基礎の土砂流亡での陥没を防ぎ、石積みの裏詰めに使用した栗石も下方粘土を使用したはがね巻き工法がとられている。

採石した石は形に応じ巧みに組み合わせて積まれ一つ一つの角を丁寧に揃り合わせて積む「切込みはぎ」で隙間をなくし、特に隅合上の石の配列を菱型にした「亀甲積み」はきわめて美しく、大手橋附近の重ね積み（帝積み）とともに優れた造形美を見せている。堀外側の石垣は東南から西へ回るに従い粗末になり、「打込みはぎ」から野面積みへと変わっている。

石垣の高さは、堀底から三・六四メートル、その勾配は頂上と底で二九センチと直立に近く、頂上には板石をもってわずか堀方向に突出させ、石垣をよじ登る敵の侵入を防ぐ武者返しが設けられている。石垣上の上塁はその敷が七・三七メートル、高さは二・二七メートルあり、頂上の武者走りは二・二メートル幅で、上手はしっかりした芝土手である。

堀の幅は大手橋附近がもっとも広く九・一メートルあり、他はやや狭くなって平均七・三メートルとなるが、北・北東・東南の三稜堡をカバーするだけしかなく、南西・西側二稜堡を囲む約二〇〇メートルは未完成のままになっている。

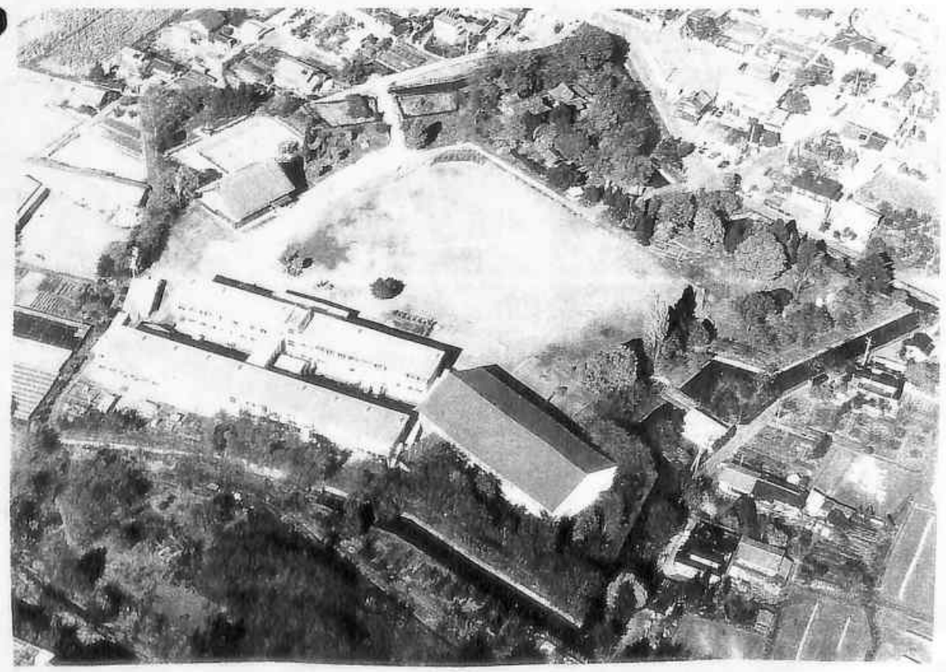
大給松平氏は代々「陣屋格」といい、城を持つ資格がないため、五稜郭内部には天守閣その他さまざまな防衛施設など作れないので、一般政務と藩士の住居を兼ねた御殿と、陣屋内住居を装飾付けられている藩士の小屋・番屋・太鼓櫓・火薬庫の他、藩に資献のあった歴代藩主三名を祀った三社様・稲荷社その他で、門は大手門と東側通用門が出来上がっていた。

慶応三年四月、城も完成し殿工祝いまで行っているが、堀・石垣同様内部建物も瓦は全部準備しながら、一割にも満たない使用で、建物のほとんどは板葺きで、明治六年の取り壊し目録を見ると記されている。未完成のまま中止せざるを得なかったのは、崩壊間際の幕閣にあって、老中格・陸軍総裁などの要職にあった乗謨には、もはや係わっているひまもなく、完成のためにつぎ込む費用なども全く許されなかったからであろう。

この星形稜堡を有する五稜郭は、フランスのヴォバン元帥が十四世紀に考案したものであり、山から遠く離れた平野の真ん中にあってこそ、その機能を十分に発揮できる平城である。当時各藩の競ってオランダ・フランスなどから導入した大砲は、その射程距離も長く、一日砲撃されれば一キロ余の射程距離内は命中率百パーセントのため、徹底的な破壊をまぬがれることは出来ない。そのくらいのことは、乗謨の洋学知識では十分わかっているはずなので、生涯に一度の夢を托したものである。

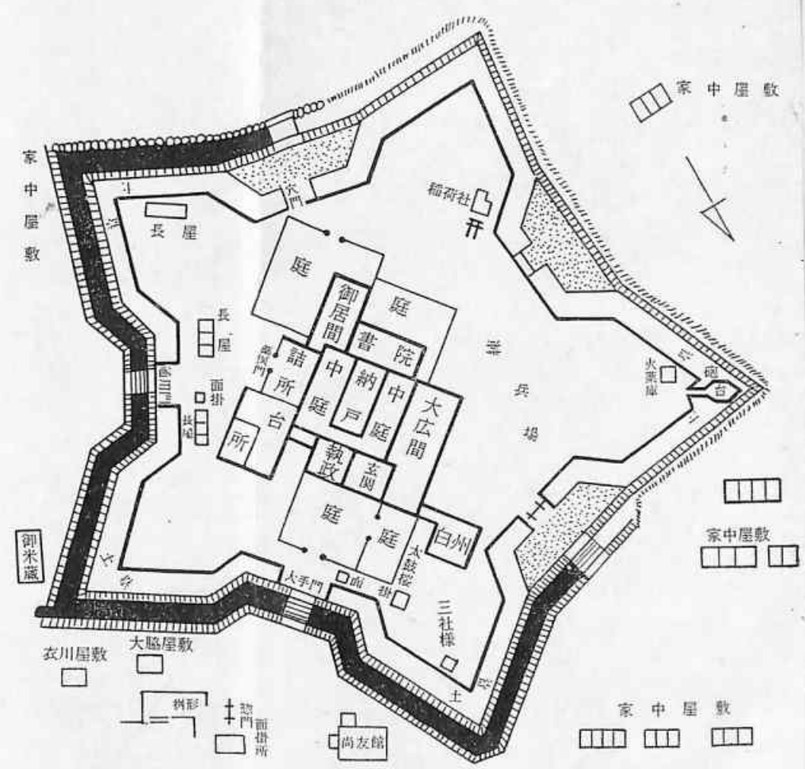
実戦に使用した五稜郭はきわめて優れた城であり、各稜堡に配置自由の砲を設置するか、大規模のものであれば何門も配置することにより、敵に対して死角をなくして十字砲火を浴びせられる長所がある。守るに易く攻めるに難かしい構造であり、従来防衛の面ばかりが見られてきたが、外へ打って出るにも各稜堡から横断射撃の下、各門から四方八方何れへも迅速に出て、かつ屈間銃戦態勢を可能とし、撤収の際もは稜堡による援護射撃で、何れの方向からも安全に城内に引くことの出来る点は、日本の城のように大手・搦手以外打って出たり退いたりすることが出来ない構造と違い非常に合理的な設計といえる。

明治四年、廃藩とともに兵部省は全国の城郭取り壊しを命じた。五稜郭は地所・石垣はそのままと建物は入札払い下げとなり、残りは取り壊された。しかしたが、御殿の一部御台所だけはさいわい翌五年学制発布により学校としての使用申請が認められたため、唯一の貴重な遺構として残された。敷地は居宅に補し、その大半が小学校用地として使用されてき、御台所は長く校舎として使用されたが、昭和四年、現在地に移され、昭和三十五、六年にわたり半解体復元工事が行われた。



市内の寺小屋現存の大方図

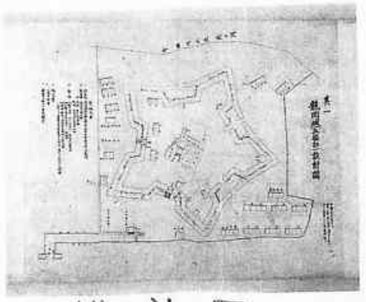
丸山邸の薬医門と塀



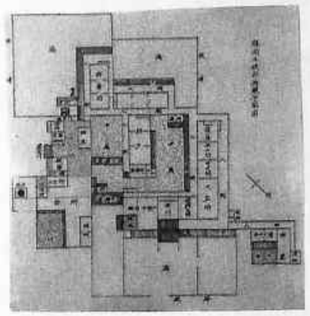
築城大要（大給亀崖公伝・田野口陣屋日記による）

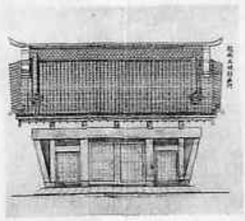
一、所在地　信濃国佐久郡田野口村字龍岡
一、総面積　二万百七十五坪（66694㎡）
　内　内城　五千六百四十坪（18645㎡）
　　外城　一万千五百三十五坪（48049㎡）
一、設計
　●櫓幅　四間（7.27m）
　●大手門前　五間（9.09m）
　●土塁　高サ七尺五寸（2.27m）
　●幅　四間（7.27m）
　●周囲堀　長サ　三百七十五間（682m）
　●堀の深サ一丈二尺（3.64m）
　●大手門ヨリ最後方角（西正中角）マデ
　●百三間（187m）
　●通用門ヨリ北門マデ　八十間（145m）
一、着工及竣工　元治元年三月着工ヶ慶応三年四月竣工
一、総費用　四万余円
一、普請奉行　家老　出井勘之進

昭和七年～八年　保存会にて復元工事施工
昭和九年五月一日　文部大臣より史跡に指定

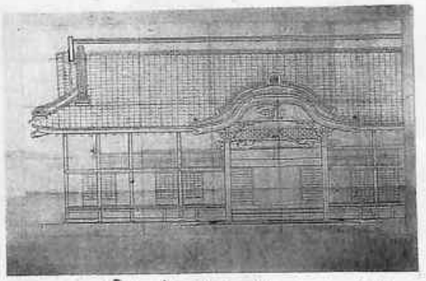


設計図





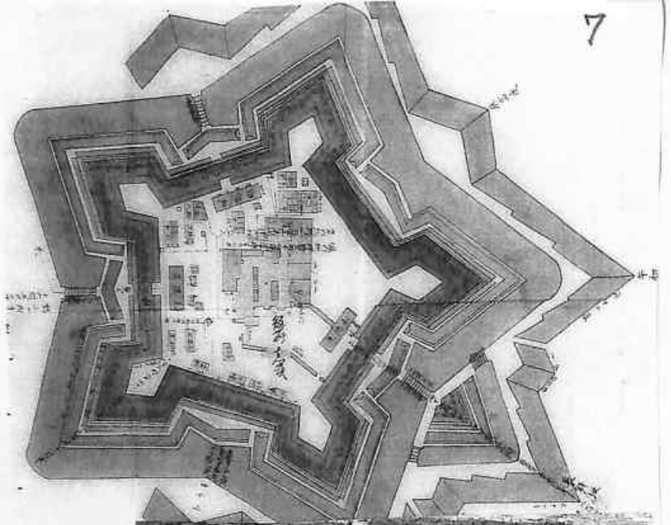
←竹成平面図　↑表門



内、外周遠地割

←松平乗謨

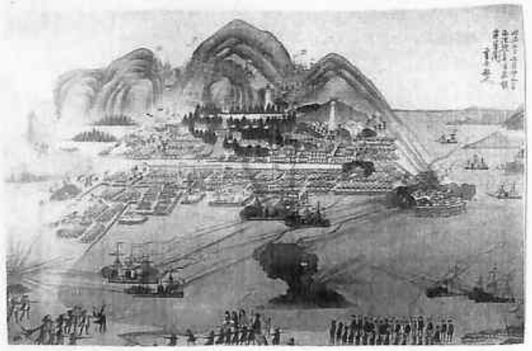
→竣工当時の村絵図



函館五稜郭跡の概要

安政元年（1854）日米和親条約に調印した徳川幕府は箱館開港を決定するとともに北辺防備、蝦夷地開拓を目的として箱館奉行を再置した。当時の奉行所は函館山北東麓に位置していたが、港に近く軍事上極めて不利なことから、内陸部に移転することになった。安政2年（1855）伊予大州藩士武田斐三郎成章を箱館奉行所詰の諸術調所教授役に登用し、五稜郭の設計、管理にあたらせた。工事は安政4年（1857）春に着工し、8年の歳月をかけて元治元年（1864）に完成した。五つの突角のある星形をしていることから、五稜郭と呼称されているが、ヨーロッパ中世に発達した稜堡式築城法を採用したものである。郭内には、箱館奉行所をはじめ付属棟20余りが配された。明治元年（1868）維新政府の行政庁となったが、同年10月1日幕府脱走軍に占拠され、翌2年5月彼等が降伏するまでの間、明治維新の最後の内乱である箱館戦争の舞台となった。明治4年（1871）札幌に開拓使本庁を建設するにあたり、木材を必要とする理由で、奉行所および付属棟のほとんどが解体された。今日現存する建物は、わずか兵糧庫1棟のみである。明治6年（1873）陸軍省の所管となり、大正2年（1913）当時の函館区に貸与され、翌3年から公園として開放されている。大正11年（1922）史跡に指定され、昭和4年（1929）には堀の外周の長斜坂も追加指定されている。昭和27年（1952）特別史跡に指定され、今日に至っている。

桜本武物　土方歳三



函館戦争

四稜郭跡

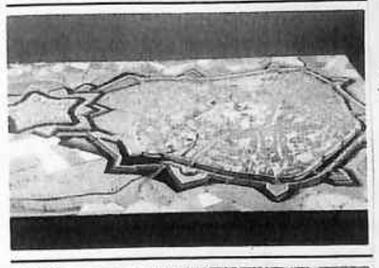
←↑品川台場

函館、箱館のモデルとなった
フランスリールのボーバン城

世界星形城郭サミット（1997札幌）参加都市

カナダ
ハリファックス
城

フィンランド
ハミナ城



ドイツ
ミュンスター
城

イタリア
パルマノヴァ城

オランダ
ヘルダーツ
ソュイス城

ロシア
ポークト、
ペテルブルグ城

フランス
カレー城

ベトナム
フェ城

	城史跡ＯＢ会＝日帰りバスで＜松代城＞と＜龍岡城＞を歩く
＜日時＞	平成１８年１１月１１日（土曜日＝雨天決行）
＜主要行程＞	五井駅東口５時４５分、八幡公民館６時００分、蘇我駅西口６時１５分 （１５分前集合） 往路＝湾岸、首都高、関越自動車道、上信越自動車道、佐久インター＝龍岡城 上信越自動車道、長野インター＝松代城、城下（時間あれば川中島古戦場） 復路＝往路を逆走　２０時３０分ころ着

龍　岡　城（信濃の五稜郭）

10:00～11:00

弁当を渡す。

1）　もう１つの五稜郭（プロローグ＝築城とその背景）

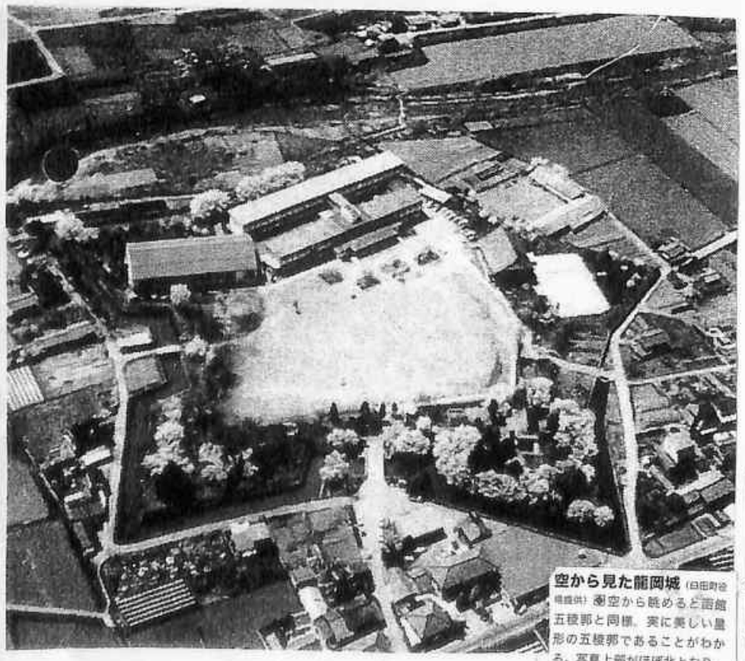
① 稜はかど、五稜郭は５つの角を持つ星型の城をいう。ほかに四稜郭も八稜郭もあった。明治維新の戦いで最後の戦場となった函館の五稜郭は有名だが、もうひとつの五稜郭が長野にあったことは意外と知られていない。

② 幕末、ペリー来航で300年泰平の夢を破られた幕府は、全国に海防のための台場建造を指示し、元和以来の新城禁止令を事実上解除した。最新技術を誇る外国船の砲撃に対抗するには洋式の砲台しかない。緊急築城された台場には先進諸外国から輸入した洋式大砲が配備された。

③ 当時、幕府の老中格、陸軍総裁の要職にあった三河奥殿藩１万6,000石の松平（大給）乗かたは早くから西洋兵制や兵器に着眼、洋式城郭の優位性を主張していた。乗かたの胸中には奥殿の旧式陣屋にあきたらない洋式城郭のロマンがあった。

④ 乗かたは城郭制限が緩められた文久３年（1862）、幕府に信濃・田野口にあった分領への新城築城を願い出、元治元年（1664）着工、慶応２年（1866）竣工、翌３年４月に本丸御殿も完成した。総奉行は家老出井勘之進、総工費はおよそ４万両（現在の40億円？）であった。

⑤ 当時、乗かたは幕閣としての地歩を固めるが、一方で時代は大きく変化していた。この年10月15代慶喜は大政を奉還、翌４年１月鳥羽伏見の戦いがはじまり、徳川幕府は270年の歴史を閉じた。



空から見た龍岡城（臼田町役場提供）◉空から眺めると函館五稜郭と同様、実に美しい星形の五稜郭であることがわかる。写真上部がほぼ北となり、上部の虎口が黒門、その右が大手、そして写真右側が通用門となる。左上方のプール脇の建物が御台所である。また、写真左側にはまったく堀が巡らず未完成であったこともよくわかる。

大給恒（おぎゅうつねお）像◉1839～1910　龍岡城跡に建てられた龍岡藩主松平乗謨の像。明治になり大給恒と改名する。徳川幕府と明治新政府の数々の要職を務め、日本赤十字社の前身である博愛社を創立した。

↓龍岡城遠望

2）　未完成？に終わったロマンの城（そして廃城）

① 天守閣もない、２、３の丸もない ― あんなのが城だろうか？回りは不審がったが本人は得意だった。「城壁もっとも堅固、殿楼すこぶる壮麗、ことに五稜郭は函館のほか天下無類の観ありき」と。

② 星型の城郭は石垣は５角形だが、水濠は３角まで、未完成との見解もある。

③ 大手門前に村道からの引き込みの升形と総門、藩校、周囲に武家屋敷を配した。

④ からめ手側２角に水濠はなく、雨川と泥田堀を利用した。

⑤ 明治維新後廃城、建造物は競売、売却、多くが現存している。
表御殿は佐久市落合の時宗寺本堂に、東通用門は佐久市野沢町原の成田山の門に、書院と納戸は佐久市の民家に引き取られた。また御台所は小学校校舎を経て現存している。

⑥ 堀と土塁は取り崩して埋め立てられ、いったん龍岡城は地上から姿を消した。

⑦ 龍岡城をもう一度世にだそう。昭和７年、地元村々の人たちが村をあげて堀り起こしが始まった。ツルハシ、クワ、モッコの文字どおり人力による復元作業だが翌８年ついにその全貌が蘇った。

⑧ 「五稜郭は私たち先祖が残した誇るべき遺産」、いまも地元「龍岡城五稜郭保存会」の方々が貴重な文化財を守っている。

3）　資料館をかねた「五稜郭であいの館」

① 藩校「尚友館」跡に「五稜郭であいの館」。資料館兼休憩所、トイレ。
保存会のみなさんが交代で詰める。こころづくしのお茶、茶受けの接待もある。ありがとう。

② 資料館では松平家や龍岡城の歴史資料、写真などを展示している。

③ 概要と御台所櫓を
佐久市臼田文化センター山下館長、保存会の細谷会長にご案内していただきます。

4）　壮大な棟門が立った大手門跡

① かつて50mほど離れた旧道から石垣、土手並木（土塁、升形）でカギ型に城内に導かれた大手道路は改変されてまったく当時を窺うことはできない。また、五稜郭の外周50～100mに板塀の外郭がめぐり家中（武家）屋敷や長屋が置かれた。

② 巾５間の水濠は大手門でちょっぴり下がり横矢がかかる。内側は腰巻き土居、この土塁の角に砲台を築く。しかし防御面では堀巾が狭く大砲や近代銃器を意識したともいえない。

③ 石垣は城正面部分は切り込みはぎで横めじを水平に通した布積み、六角形に加工した亀甲積みが、からめ手側はかなり粗雑で野づら積みになっている。

④ はね出し（しのび返し）は台場石垣に用いられた特殊な石積み方法、敵がはい上がれなくするのが目的だが石垣が低く効果はいまいち疑問だ。

⑤ 大手門は両脇石垣いっぱいに大型の棟門？入って右側に門番所と鼓楼が置かれた。廃城後、大手門を撤去、買い手なく薪材として処分された。

←大手門

大手橋

↓龍岡城もよい

三社神社

←であいの館

資料展示室

5） **外観は洋式でも中は純和風、豪壮華麗な御殿跡は小学校グランドの地下に**

① 現存する表御門絵図面によると、９間１戸平屋、屋根大入母屋造り本瓦葺き、唐破風、式台、車寄せ玄関、正面に大型の舞羅戸が４枚、御殿建坪は五稜郭のおよそ４分の１、1,500坪であった。

② 玄関、広間に続く表御殿は表御殿で藩役所、奥御殿は藩主家族、書院、居間は藩主の私邸、しかし藩主乗かたは江戸詰めで、国元で執務することはほとんどなかった。

③ 明治６年廃城、売却、表御殿、書院、納戸などが市内に現存している。

6） **藩祖松平真次以下を奉る三社神社（田口招魂社）**

① 松平家初代藩主松平真次、２代乗次、８代乗尹を奉る。江戸屋敷から移築。

② 明治維新の戦いで戦死した藩士４人と日清、日露戦争、太平洋戦争の田口村戦死者を合祀。

7） **通用門の黒門は水濠の終点**

① 冠木門、門番所

② 石橋で堀水をせき止め、水濠終点に。

③ 時間あれば周辺石垣を外側から考察する。

8） **小学校校舎として活用された御台所櫓（山下館長説明）**

① 当時、藩では御台所を「御台所櫓」と称した。天守閣や櫓を持たない陣屋格大名にとって櫓はあこがれだったのだろう。城中で一番高かった御台所をとくに「櫓」と呼んだ。

② 維新後引き取りてがなく、かといって新築を廃棄撤去ももったいない。直後の学制発布で小学校に。大幅な改造工事が行なわれたが使いにくかったという。昭和はじめ校庭真ん中から現在地に移した。

③ 戦後、龍岡城史跡として保存が決まり、改造部分を旧に戻した。

④ 屋根切り妻造り、さん瓦葺き、９間×７間、壁面上部白漆喰真かべ、下部下見板張り
内部は２階、土間部分吹き抜け。藩主家族の食事を作った。

9） **１門しかない大砲が雨川方向を見据える**

① 五稜郭は本来、５方位に向けて砲台を構える。大砲は１門だけ。回転自在砲を南西角に据える。
敵襲は雨川方向しかなく１門で十分？

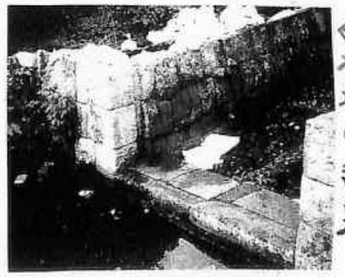
② 土塁下に火薬庫、周辺は練兵場であった。

１０）**松平家菩提寺の蕃松院を遠望**

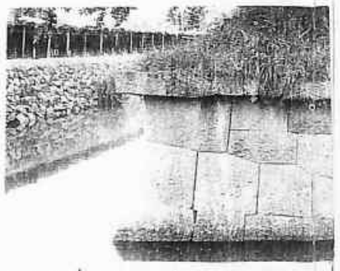
① 松平家ゆかり、歴代藩主の位牌を祀る。天正10年創建の名刹で、小諸城主松平康国が父信蕃追善のため建立された。小高い山腹から五稜郭を見下ろす。

② 松平家の菩提寺は赤坂浄土寺だが、現在は品川区荏原１の浄土寺墓地に歴代藩主の墓と「大給家之墓」およそ20基ほどが整然と並ぶ。乗かたの墓は渋谷区広尾駅近くの祥雲寺の小高い丘上にある。大きな自然石が明治の改名＜大給恒之墓＞を刻んでいる。

田口小学校



←北塁の様子



↑野づら積み ↑はね出し

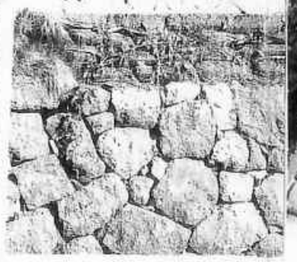
龍岡城の石垣

お台所やぐら

小屋組

きっこう積み

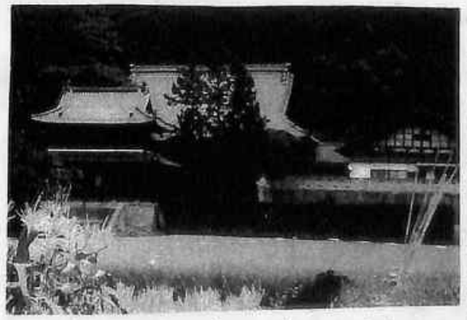
←布積み



切込みはぎ

兵戦陣屋跡

東京祥雲寺の乗かたの墓



蕃松院↑と乗かた位はい

新時代を拓く松平乗謨

大番頭から老中・陸軍総裁へ

龍岡城建設中の時期の幕末から明治にかけて松平乗謨は将軍の警備のために京都二条城に出向いている。二条城西門の警戒がその任務であったといわれる。その後再び江戸に戻り、大番頭から若年寄に昇進した。同時に縫殿頭に任官し、いよいよ天下の政務に参与することになったが、内外ともに幕政の多忙なときであった。幕府はすでに開港していた横浜港を再び閉鎖しなければならない方向に追い込まれていた。政事総裁松平大和守はこの方針を貫くために関内の反対派の開国急進論者を関内から追放する必要があった。松平大和守に嫌われた松平乗謨は突然若年寄の要職から免職となった。しかし国家の重大な時期に優れた人材を無駄にすることは大きな損失であるとして、11日後の6月29日には再び使用されたが、鎖国へという考えが強かったので自ら辞職することになった。

慶応元年（1865）には陸軍奉行の要職について軍務を総轄することになった。さらに若年寄陸軍用掛となり、翌慶応2年老中格に抜擢された。この頃の老中は人物が優れている上に一般には5万石以上の大名でなければ登用されなかった。

14代将軍徳川家茂は反幕勢力の長州を攻撃するために大阪城にいたが、病に倒れて逝去した。このとき松平乗謨は葬儀掛（委員長）としてその大役を果たしたのである。この年に27歳の若さで陸軍総裁に就任した。

慶応2年（1866）暮れに徳川慶喜が15代将軍に就任したが、その20日後に孝明天皇は崩御された。このとき松平乗謨は総髪となって喪に服した。幕府は長州攻撃に敗北し、討幕運動に対抗する方策もなくなってしまい、朝廷に大政奉還を申し出るために、陸軍総裁松平乗謨は海軍総裁稲葉兵部大輔とともに京都に出向いて大政奉還の交渉に尽力した。

その後京都から江戸に戻ったが、この重大時局に病に倒れて止むなく陸軍総裁の要職を辞任した。

明治元年2月17日松平乗謨は信州田野口へ引き上げた。この日に松平の姓を三河の先祖の地名にちなんで大給と改めて出直すことになった。

この頃幕府の残存勢力が北越方面から信州に侵入するという情報が流れた。朝廷は信州田野口藩に対して「追討に参加せよ」との命令を出した。田野口藩は実戦の経験はなかったが、藩主の謹慎中ということもあって少しでも功名を立てる努力をしたようである。

大給乗謨の謹慎もいよいよ赦免となり、田野口藩を龍岡藩と改名したが、青年時代に漢詩を勉強したときの雅号の龍岡にちなんで改名したものと伝えられる。

明治元年8月27日明治天皇は即位され、新時代の機構改革に対応して版籍奉還が行われていたが、大給乗謨はこの年の暮れに東京に出て版籍奉還の献上書を朝廷に提出しているから、この点でも先見性を発揮している。

明治2年6月には龍岡藩知事に任命されている。後大給乗謨を恒と改名し再出発をしたが、11代松平乗謨、大給恒が田野口へ本拠を移転してから9年、明治4年に廃藩となった。

再び中央へ進出

大給恒は廃藩の決断を心に極めて信州を去り、東京の旧藩邸に住むようになった。民部省出仕を仰付けられているが、これは率先して廃藩を実行した優遇処置ばかりではないように思われる。また、左院少議官に就任して再び中央政界において活躍の第一歩が始まった。

明治5年10月、大給恒は左院の3等議官に任命された。当時は明治新政府の要人が海外視察に出張して帰国している。その頃外国における勲章が話題に上ったようである。日本でも勲章に関する研究をする必要に迫られ、明治6年この方面の最適任者として大給恒ほか4名が選ばれた。大給恒はメダル取調御用掛を命ぜられ、式部寮御用掛となって賞牌調査の専任として世界の勲章を研究した。

明治8年7月には元老院議官に抜擢された。明治9年11月賞勲事務局の副長官に就任した。このとき長官は伊藤博文である。翌月賞勲事務局は賞勲局となり、その後賞勲局正副長官を改称して総裁には太政大臣三条実美、副総裁には大給恒が就任することになった。また明治28年以来賞勲局総裁をつとめて、その方面でも多くの実績を残している。

博愛社の創設

西南の役における死傷者は続々発生して軍医や医療関係者は不足し、戦場の悲惨な状況が東京に報告されてきた。政府関係者も率先して同族華族に奨励し、金品を拠出してもらい救済の費用にしようとしていた。

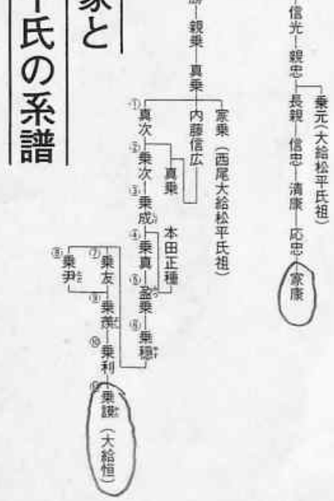
このとき元老院議官大給恒はすでに幕府の頃シーボルトなどから軍人救護会社のことを聞いており、これを是非実施したいと考えていた。

佐野常民（九州佐賀藩出身）は慶応3年のパリ大博覧会と明治6年のウィーン大博覧会に2回にわたって代表としてヨーロッパに行っている。普仏戦争のあとの赤十字活動についてある程度の知識をもって帰国し、今こそヨーロッパの赤十字組織と同じものを作ろうと考えたのであろう。

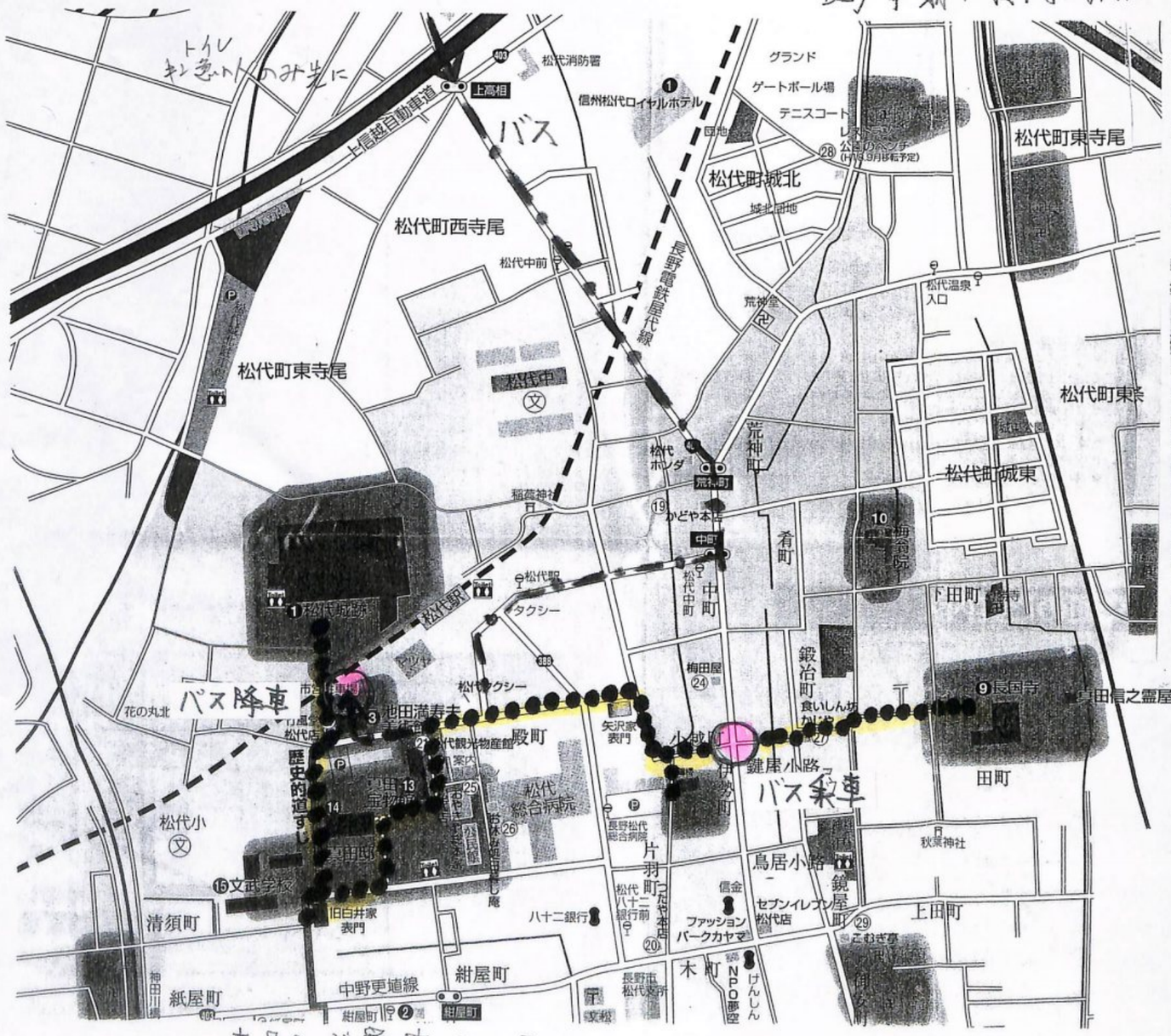
大給恒と佐野常民の意見は完全に一致し、早速計画の実行に移った。しかし実際に救護活動をするには政府の許可を得ることが必要であった。そこで嘆願書を太政官に提出したが、嘆願書の中に書かれていた「敵味方の区別なく戦場の負傷者を救助すること」について政府は難色を示し、却下されてしまった。

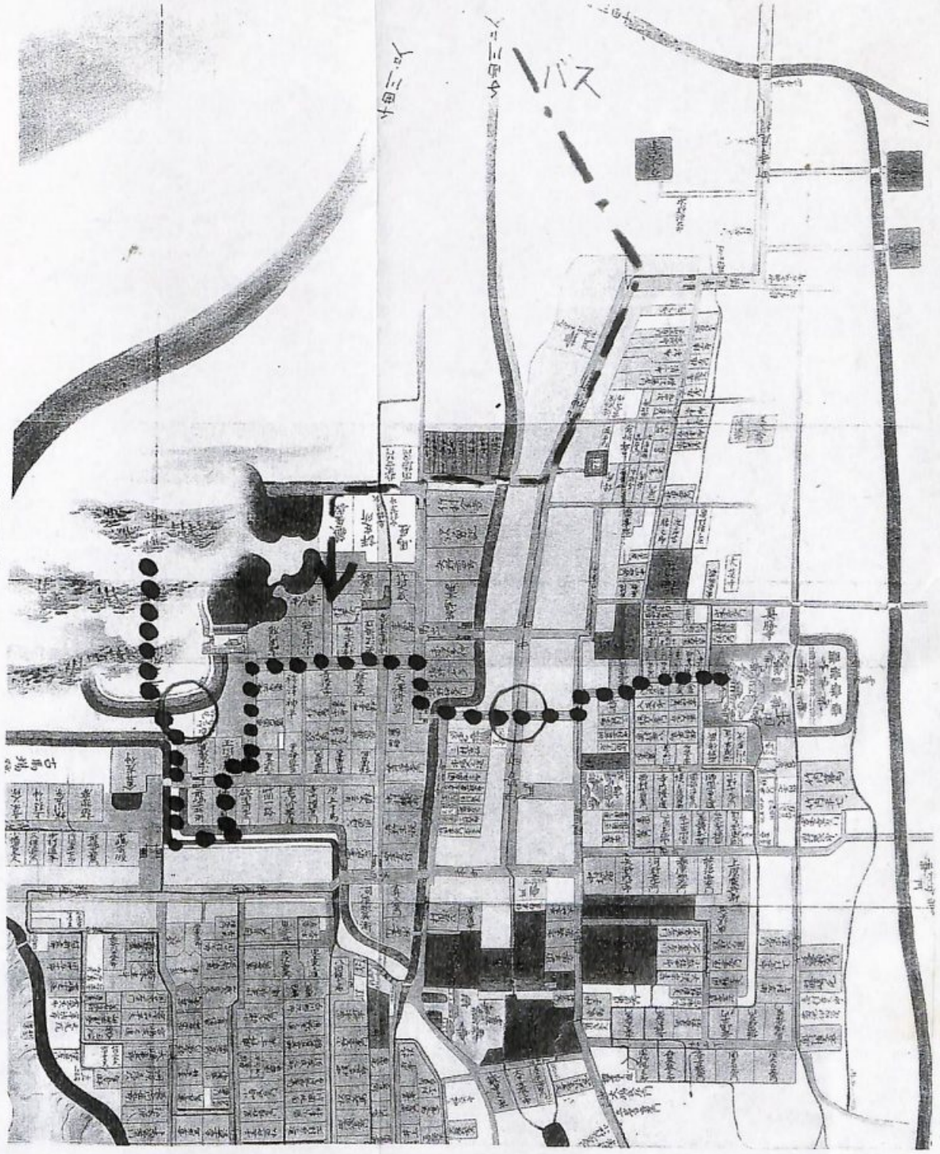
佐野常民は、有栖川宮熾仁親王に嘆願書を提出した。この明治10年5月1日が日本赤十字社（当時博愛社）の創立日とされている。有栖川宮熾仁親王は自ら戦場の実情を理解していたので5月3日に博愛社の活動を認められたのである。その後博愛社の発起人であった大給恒と佐野常民の二人はともに副総長に就任した。

徳川宗家と大給松平氏の系譜



松 代 城 （海津城）





松代城

長国寺

埋門

二の丸土塁のトンネル状の門です。絵図をもとに景観のみ再現しています。

太鼓門前橋

本丸南側（太鼓門前）に架けられていた橋です。発掘調査と絵図史料をもとに復元しました。

太鼓門

本丸大手（正面）に位置します。本丸の櫓門の中で最大規模でした。

井戸

千曲川改修後に造られた井戸です。絵図をもとに再現しています。

北不明門

本丸搦手（裏側）に位置する門です。当初は千曲川河川敷に接していたため「水ノ手御門」とも呼ばれていました。

二の丸引橋

発掘調査と絵図史料をもとに、往時と同じ景観で再現しています。

東不明門前橋

本丸東側不明門前に架けられていた橋です。発掘調査により折れた橋脚は発見されましたが、詳細な絵図史料は確認できませんでした。

明治の廃城以降の松代城跡は、往時の姿が想像できないほど、城としての景観を失っていました。平成の大普請では、江戸時代の姿を取り戻すため、保存修理が進められました。本丸を囲む石垣、堀に架かる橋、威圧的な門構え、高く巡る土塁。これらの松代城の建物や構造物は、姿を変えながらも松代の歴史や文化を物語っています。川中島の合戦、戦国期の動乱、真田家の統治、明治の廃城と築城から四百年以上もの歴史的流れの中で、様々な人物が様々な思いを胸にこの城を訪れ、去って行きました。次はあなたの番です。松代城の歴史を肌で体感してください。

visit the castle

松代城を訪ねる

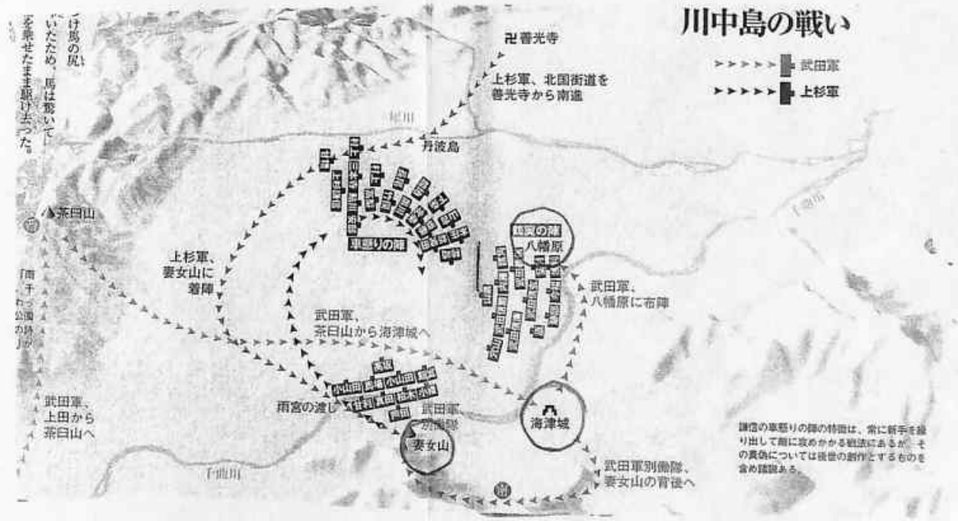
真田信之像　大鋒寺蔵

名馬として名高い放生月毛にまたがった上杉謙信は、武田本陣へ単騎駆け込んだ。手にするのは、ふんどだけで小豆が切れるという名刀・小豆長光。信玄見つけたり――宿敵の姿を認めた謙信は、一目散に駆け寄り愛刀を振り下ろした。

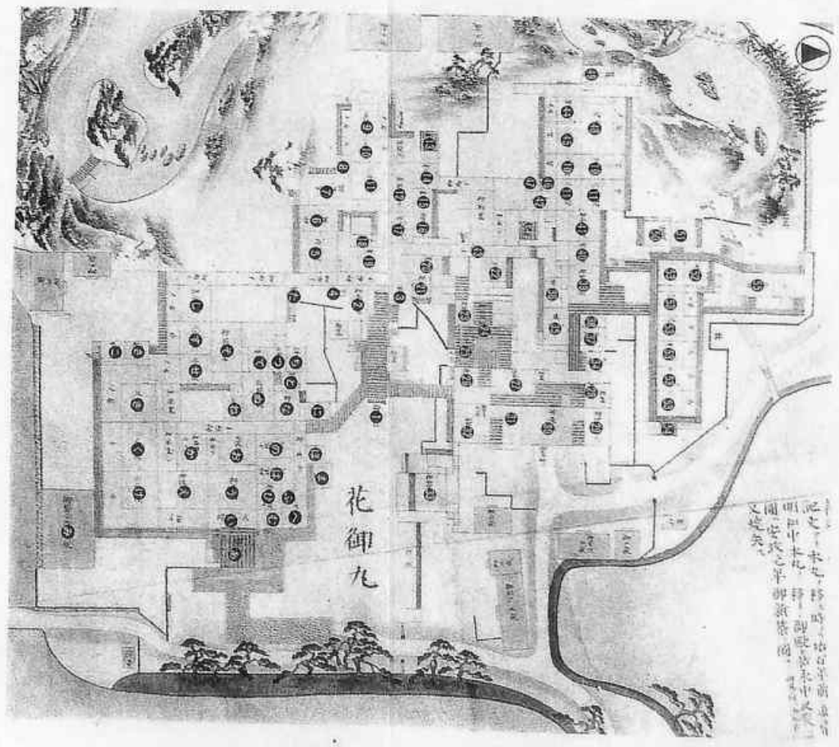
太刀を抜く余裕のなかった信玄が革胴で受け止め、3度の打ち込みで7ヵ所の傷が残ったことから「三太刀七太刀」と呼ばれるエピソードである。戦国期を代表する興亡の激突・川中島の合戦の中でも、最も激戦であった1560年（永禄3年）の第4次合戦を彩るハイライトシーンだが、現在では同盟の一芝居打ちを否定する意見のほうが多い。しかし、彼らが直接対決をしたと信じられるほどの、火花散る戦いであったことも確かだろう。

謙信はなぜ、川中島へ出陣したのか。室町幕府の権威回復を担う謙信は、領土拡張を目指す信玄に迫われた北信濃（現・長野県北部）諸将の思願を受け、彼らの旧領回復のために起ったのだ。まさに「義将」の面目躍如であろう。謙信が信玄としのぎを削った八幡原古戦場には、現在、自然石を配した小川が流れ、緑豊かな史跡公園として復元されている。

川中島の戦い



謙信の車懸りの陣の特徴は、常に新手を繰り出して敵に攻めかかる戦法にあるが、その真偽については後世の創作とするものも含め議論ある。



← 花の丸御殿絵図

松　代　城　（海津城）

12:30～15:30
16:00？

1）　**「川中島の戦い」武田信玄の前線基地・海津城（その築城）**　見るだけ（15分位）16:30？

① 戦国時代の永禄３年（1560）、甲斐の武田信玄が越後上杉謙信との「川中島の戦い決戦」に備えて築いた平城。縄張りは信玄の軍師山本勘助。現在の本丸、２の丸一帯で海津城と称した。

② ３面を切り立つ山並みに囲まれ、１方に千曲川が回る。自然立地に恵まれた天然の要害。

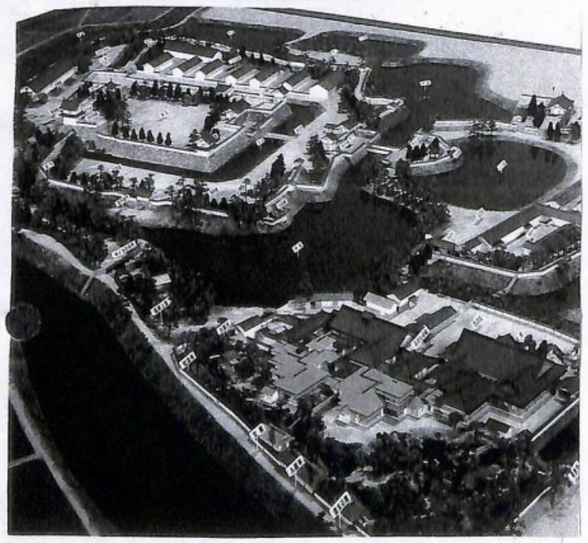
③ 築城翌年、史上名高い「第４回川中島の合戦」が起こる。上杉勢１万８千は迂回して目前の妻女山に陣を構え、武田勢２万は海津城に入った。９月９日、信玄は軍勢を２手に分けて妻女山を急襲、１隊が山麓で退路を断つ山本勘助提案の＜きつつき戦法＞、しかし察知した謙信は千曲川を粛々と渡って川中島で両軍が激突した。死傷者あわせて１万余という。謙信、信玄一騎討ちの伝説を生んだわが国戦国史を飾る名勝負とされる。２㎞ほど北東に「川中島合戦・八幡原古戦場碑」と「両将一騎討ち像」がある。時間とれれば見学。

2）　**太閤蔵入り地から真田「六連銭」の居城に（城の歴史）**

① 天正10年（1582）長篠の戦いに敗れた武田氏が滅亡、18年豊臣秀吉が天下統一をはたすと海津城は豊臣家の蔵入れ地となる。

② 慶長５年（1600）の関が原の合戦勝利、８年に江戸幕府を創設した徳川家康は６男松平忠輝を城主に据え、２男越前秀康の２男松平忠昌、酒井忠勝をへた元和８年（1622）、上田から真田信之が10万石で入封、子孫が10代およそ250年続いて明治維新におよんだ。この間、城名も「待城」「松城」「松代」と変遷、信濃の最大藩となった。

③ 真田家は信之の父信幸と弟幸村父子が「関が原、大坂冬、夏の陣」で豊臣家に与して壮烈な討ち死に、「真田10勇士」などの講談本でも有名、ただ１人長男信之が家康の人質として東軍にあったことで近世大名として家名を残した。家紋の「六連銭」は冥土の渡し賃６文に由来、戦地にいどむ真田武士の心意気を示している。



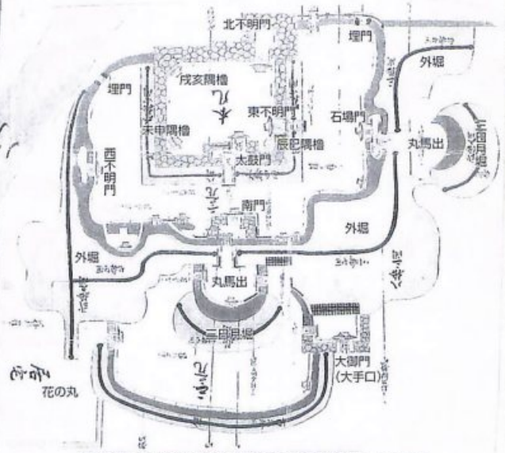
松代城もけい

武田信玄

山本勘助

川中島の戦い配置図

妻女山から海津城のぞむ



『信濃國川中嶋松代城石垣築直堀浚窮絵図』（真田宝物館蔵）
◉松代城は千曲川の洪水で頻繁に浸水した。これは寛保２年（1742）の水害（戌の満水）の被害状況を記した絵図で、幕府に修復願いを提出した際の添付図面である。石垣が２か所崩れ、堀はすべて埋まり、橋・塀にも被害があったことが記載されている。

3）　**荒々しい「野づら積み」石垣（縄張りとみどころ）**

① 縄張りは先端に本丸と２の丸を配し、３の丸をつないだ変形梯郭式平城で川城でもある。当初は千曲川に接し、相次ぐ水害に困った５代藩主信安が流路を「瀬替え」した。

② 本丸は周囲を石垣、水濠で囲む。野づら積み石垣は織豊時代から江戸時代はじめにかけてのもの、荒あらしさが魅力。虎口は大手に太鼓門升形、東と北に緊急時の不明（あかず）門、櫓は天守閣と角櫓を配した。明治維新後廃城、建物は取り壊され、堀は埋め立てられ、石垣も倒壊したが、平成７年から復元、修復工事が行われ８年をへた１昨平成16年に完成した。

③ 当初、藩主は本丸御殿に居住、江戸中期に２の丸「花の丸御殿」に移る。幕末、３の丸「真田邸」を改造、参勤交代制度の緩和で江戸屋敷から母を迎えた。花の丸御殿は明治６年焼失、真田邸も修復工事中だが、藩主霊廟、藩校や重臣邸、武家屋敷門など多くの建造物が現存している。

4）　**城内を長野電鉄線が走り抜ける（城内馬出し跡でバスを下りる）**

① 市営駐車場で降車。かつて松代城内、３の丸丸馬出し「三か月堀」跡にあたる。丸馬出しは武田氏の城に多い。

② 目の前の駅舎は長野電鉄「松代駅」、ローカル単線で電車はめったに通らない。
城内２の丸、花の丸と３の丸、武家屋敷地を分断する。

③ 線路先の土塁石垣は２の丸南門＝３の丸馬出しからの虎口、手前両側に外堀、２の門の冠木門と豪壮な１の門の櫓門で外升型を形成した。案内看板で松代城全景を確認する。

5）　**本丸水濠と石垣が出迎える（本丸大手）**

① 正面に松代城本丸大手。周囲を内堀、石垣が回る。
本丸石垣と水濠は方形、角櫓にも櫓台がない。折り歪み、横矢がないのはめずらしい。

② 本丸石垣は「野づら積み」（後出）、明治維新後放置、荒廃した石垣を整備して積み直した。
少し赤みがかった黒石が近くの皆神山からの切り出し現存。白っぽい石が復元時に加えられた。

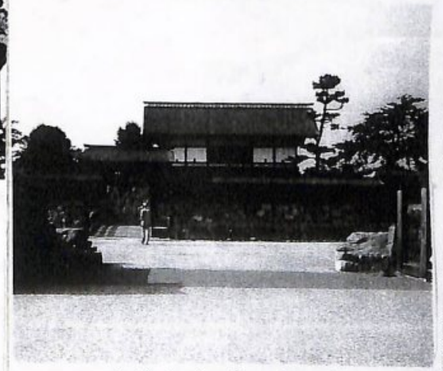
6）　**江戸はじめに復元、切り妻、こけら葺き屋根**

① 太鼓門と升形＝松代城本丸の正門。木橋、高麗門、升形、櫓門。内升形、食違門（左右折れではない）

② 名称は櫓門に合図の太鼓が据えられたことに由来

③ 切り妻屋根、しゃちなし、こけら葺き
江戸初期、寒冷地では瓦が寒さや氷結で割れやすかったので板葺き（ひわだ、コバ）が多かった。
享保以前の図面を参考に復元、後期は入母屋屋根、本瓦、しゃちとなる。

④ 巨大な主柱、梁、大御門、漆喰真壁、格子狭間

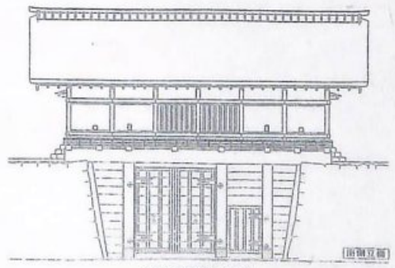


松代城正面

太鼓門高い内

やぐら内

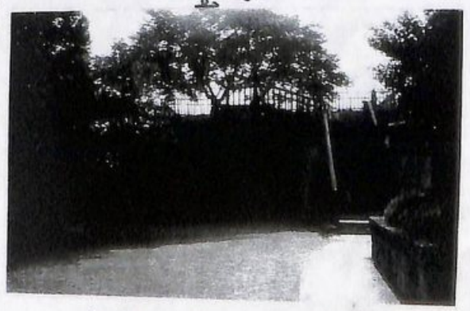
太鼓　内



太鼓門南側復元立面図

太鼓門の構造や規模

太鼓門		
仕様	櫓門、木造、切妻造、柿葺き 壁：真壁土壁、漆喰仕上	
規模	門部：桁行二間、梁間二間 櫓部：桁行六間、梁間三間	
寸法	棟高：11.194m 桁行：(門)6.636m、(櫓)11.820m 梁間：(門)4.484m、(櫓) 4.924m	
構造門		
仕様	一間高麗門、木造、切妻造、柿葺き	
規模	桁行一間、控え一間	
寸法	棟高：6.244m 桁行：3.636m　控え：1.970m	
続き塀：延長22.829m		



本丸石垣の内部

7） **藩主が居住した本丸御殿跡**

① 本丸は本来藩主の居所で政務の場、江戸後期の明和７年（1770）花の丸御殿が建造されるまでの歴代藩主が居住、本格的書院造りで大玄関、式台、大広間、政務を行なう表向きと藩主の私邸、側室や子女が住む奥向きにわかれた。解説板の本丸絵図は残念ながら不鮮明。

② 享保２年大火焼失、寛保２年の千曲川洪水では本丸御殿が床上浸水、藩主は城下の開善寺へ避難した。

③ 後期藩主は花の丸御殿に居住、明治維新時の本丸は空き地。

8） **武田信玄「川中島」の「海津城碑」 ― 本丸の遺構**

① 第４回「川中島の戦い」で信玄が本陣とし川中島に出陣、妻女山、川中島の方向を確認。

② 東不明門、北不明門＝不明はあかず。緊急時以外は閉鎖。

③ 戌亥の隅櫓台（展望台＝伝天守閣跡）発掘調査は江戸中期の隅櫓瓦などを検出、織豊時代の遺物はなかったが規模や形式からも天守閣の存在は確実といえる。

9） **からめ手の守りと伝天守台を外側から観察**

① 北不明門からからめ手口へ。はじめ不明門から先は千曲川、地下に４ｍ高石垣が埋まる。

② からめ手口は瀬替え時に構築、百間堀は旧千曲川、元の流れを確認。

③ 改めて伝天守台の石積みを見直す＝野づら積み、扇の勾配（なだらか）、角の算木組は発展途上、旧写真は石垣内側に力が集中するよう「たわみ」を持つなど豊臣時代の特長がよく現われている。

④ 珍しい「埋門」＝本丸籠城の時、内側に土を盛って虎口を潰す。

１０） **いまは住宅地、花の丸御殿跡を遠望**

① 本丸南西、長野電鉄線際に「花の丸御殿跡」、明和７年下屋敷（藩主別荘）として建設、後期の藩主居館に、花の名に相応しい豪華絢爛たる書院建築だが、明治維新後の県庁舎時代に焼失した。

② 現況は住宅地で「跡碑」。立ち寄らない。

本丸御殿跡

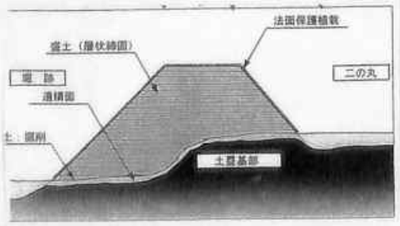
北不明門

海津城址石碑

発掘調査

天守台

←からめ手土塁



花の丸
石碑と後

１１） **佐久間象山ゆかりの文武学校（団体入場、見学20分＝中止することがある）（藩校）**

① ８代藩主幸貫は教育に熱心で、藩士に文武を奨励した。松代藩士で幕末の著名洋学者佐久間象山の意見を取り入れ蘭学や西洋砲術も教える藩校・文武学校の建設を進める。文武学校は次の９代幸教の時完成、幕末の安政２年（1855）に開校した。

② 敷地面積およそ1,000坪、建坪500坪、文学所、御役所、教室、剣術所、柔術所、弓術所など。中心となる文学所は藩主用、教授用、生徒用と玄関も３つに分かれる。

③ 当時の藩校がほぼ完全に残っているところは少ない。

１２） **真田勘解由邸、真田邸、武家屋敷門、鐘楼を巡る（武家屋敷から城下町へ）**

① 重臣で藩主一族の真田勘解由邸＝一部に城建物を移築。非公開、外観だけ。

② 旧白井家屋敷門＝150石とは思えない立派な長屋門。

③ 真田邸＝幕末、文久２年（1862）参勤交代の緩和で国元に迎えることになった９代藩主幸教の母お貞の方の隠居所として建設、敷地面積2,400坪、建坪250坪、部屋数53を数える。残念ながら解体修復作業中のため内部の見学不可。時間許せば京都公卿邸を模したとされる庭園だけ。

④ 真田邸前の真田公園で小休止（トイレタイム）

⑤ 真田宝物館＝今回は立ち入りません

⑥ 小山田邸屋敷門、矢沢邸屋敷門

⑦ 旧松代藩梵鐘

１３） **藩祖真田信之の眠る御霊屋（団体入場＝中止することがあります）（真田家菩提寺長国寺）**

① 旧北国街道を抜けるとほどなく長国寺の総門に出る。

② 戦国時代の天文16年（1547）真田家の祖先幸隆が真田郷の松尾城内に真田家菩提寺として創建、元和８年（1622）真田家の移封にともなって現在地に移転。曹洞宗修業道場。

③ 変わった形の屋根。方形造り、望楼風？初期天守原型を思わす。
正面に真田家の「六連銭」家紋、しゃちは松代城から移築。７間１戸、向背、軒破風はない。

④ 本堂裏手に初代藩主真田信之と４代信弘の霊廟、２、３代は明治５年に焼失。
歴代藩主、家族の墓、大坂夏の陣で戦死した真田幸村、大助父子の供養碑も。

⑤ 信之の霊廟は国重要文化財指定、極彩色、金銀をめぐらせた豪華絢爛の造り。
霊廟内陣は極彩色のふすま絵と彫刻、格天井は狩野探幽筆と伝える。今回は中には入らない。

１４） **北国街道、長国寺入り口近くでバスに乗車**

１５） **時間あれば「川中島古戦場跡」に立ち寄る**

以上

文武学校正面

文学所

武家屋敷門

鐘楼
←北国街道

真田邸↑↓

長国寺↑↓

→長国寺
ALBUM
←真田邸庭園

撮影：皆川清

←松代城天守台

↑みごとな紅葉が随所に

↓松代城の水濠と石垣を解説

↑文武学校　↓長国寺

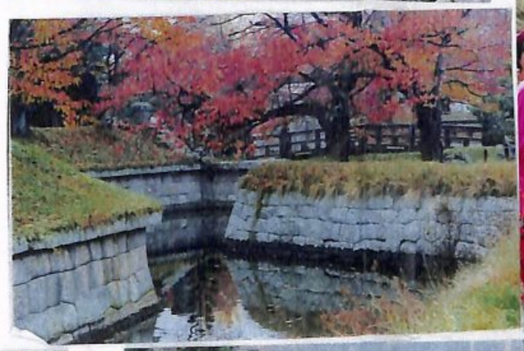
城史跡ＯＢ会＝日帰りバスで＜松代城＞と＜龍岡城＞歩く

平成１８年１１月１１日（土曜日）

主要行程＝五井駅５時４５分、八幡公民館６時００分、蘇我駅西口６時１５分、
湾岸、首都高、関越自動車道、上信越自動車道、佐久インター、
長野インター。復路は往路の逆走。２０時３０分市原着

主な見学地＝龍岡城、松代城、文武学校、真田邸、武家屋敷町、城下町、長国寺、
川中島八幡原古戦場跡

ご案内：山岸川明、市川長小出悠二



↑→龍岡城

松代城二の丸

↓松代城本丸大手

龍岡城大手門

←台所やぐらは地元
山下館長が解説

↑川中島古戦場